様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１　年　４　月　１　日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１０７
研究課題名（和文）　形容詞：絶対級と比較級の類型論

研究課題名（英文）　Adjectives: a typology of absolutes and comparatives

研究代表者
伊藤　さとみ（ITO　SATOMI）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：60347127

研究成果の概要：
本研究は、中国語で観察された比較級形式と絶対級形式の逆転現象を手がかりとして、絶対級と比較級の形式を通言語的に調査し、形容詞の意味を決める新しいパラメターを提案した。そのパラメターとは、程度抽象化操作と程度の最大化操作である。この二つの操作が、語彙レベルで行われるか、統語レベルで行われるかにより、比較級／絶対級のどちらが基本となるか、また、形容詞の意味が名詞性と動詞性のどちらに傾くかなどの差異がもたらされることを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	800,000	0	800,000
２００７年度	500,000	0	500,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	150,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：類型論、形式意味論、形容詞、比較構文、中国語

１．研究開始当初の背景

名詞、動詞、前置詞、形容詞という、四つの代表的な範疇を区別するには、[±N] と [±V] の二つの素性が用いられる（Chomsky 1965）。即ち、名詞は [+N,-V]、動詞は [-N,+V]、前置詞は [-N,-V]、形容詞は [+N,+V] である。だが、この [+N,+V] という性質は、理論的な矛盾をはらんでいる。なぜなら、この素性は、形容詞が動詞的な性質と名詞的な性質の両方を持っている、つまり、格付与する能力を持ちながら、同時に格を付与される立場にもあるという矛盾した性質を持っていることになるからである。実は、形容詞という範疇は、[+N] の性質を強く持つ属性形容詞と、[+V] の性質を強く持つ叙述形容詞という２つに下位分類することができ、言語によっては、この下位分類はいろいろな文法的ふるまいに反映されている。例えば、中国語には、名詞を直接修飾できる形容詞と「的」を修飾のマーカーとして必要とする形容詞があるが、前者は単独で述語になれないなど [+N] の性質を持ち、後者は単独

で述語になるなど、[+V] の性質を持つことが指摘されている。

しかし、形容詞に [±N] や [±V] の素性を付けることは、意味論的には問題がある。意味論の研究では、形容詞が程度という名詞にも動詞にもない特性があるからである。形容詞に形式的定義を与える試みは早くから行われてきており、例えば、Cresswell 1976 では、形容詞は個体に対して程度を返す関数とみなされている。この考え方は、近年の比較構文を始めとする形容詞述語文の研究に受け継がれているが、今度は中国語に見られるような二種類の形容詞の違いを記述することが難しいという問題が生じる。中国語の [+N]型形容詞と、[+V]型形容詞の違いは、比較級構文を作ることができるかどうかにも関わっており、両者の持つ「程度性」は異なっていると予想されるからである。

＜参考文献＞

Chomsky 1965 *Aspects of the Theory of Syntax.* The MIT Press.

Cresswell 1976 The semantics of degree. In Partee(ed.) *Montague Grammar.* Academic Press.

２．研究の目的

本研究では、二種類の形容詞の差異は程度の比較基準の与えられ方にあるのではないかと予測し、中国語の[+N]型形容詞（以下、中国語学の用語に従って性質形容詞と呼ぶ）の振る舞いについて詳しく観察した。観察の結果、中国語の性質形容詞は、無標の形式が比較級を、有標の形式が絶対級を表していることが分かった。例を挙げると、「张三比李四高／張三 より 李四 高い（張三は李四より背が高い)」の「高」が単独の形容詞であるに対して、「张三很高／張三 hen 高い（張三は背が高い)」の「很高」は程度副詞に修飾された形容詞である。この程度副詞は、もとは「とても」という程度を表していたが、現在では、性質形容詞が述語になるときに必要になる文法的マーカーとなり、程度を表す意味は薄れている。中国語の性質形容詞のこの振る舞いは、無標の形式が絶対級を表し、-er の形式が比較級を表す英語とは対照をなす。ここから、形容詞の意味論について、新しい類型論の存在が示唆される。最初に予測された類型論のタイプは、比較級-無標形式の中国語タイプのシステムと、絶対級-無標形式の英語タイプのシステムであった。中国語タイプのシステムにおいては、形容詞とは、常に比較の対象を含意し、それが与える基準を超えているかどうかを述べるものだと捉えられている。一方、絶対級-無標形式の英語タイプのシステムでは、形容詞は、その叙述の対象となる個体の属性を述べるものと捉えられている。この２つのうち、どちらがより基本的なシステムなのか、または、この両方のシステムが同じ一つのシステムから派生されるのかについて、本研究では、通言語的な調査を通じて優勢なタイプを明らかにし、さらにそれぞれのシステムにおける形容詞の特性との関連づけ、二つのシステムに対して、妥当な意味論を与えることを目的としていた。

３．研究の方法

上述の研究目的のため、世界の様々な言語の形容詞の特性を以下の６つの点およびこれらの特性の相関関係について調べた。

(1) 名詞を修飾する場合に接辞／屈折等の修飾マーカーを必要とするか。
(2) 単独で述語になるか。
(3) よく使われる程度副詞にどんなものがあるか。それらの使用が義務的になる場合はあるか。
(4) 形容詞が名詞を修飾するとき、名詞に先行するか、後続するか。
(5) 叙述文における主語、動詞、目的語の語順と形容詞と名詞の語順に関連性はあるか。
(6) 比較級構文を作る際の形式はどうか。

同時に形容詞述語構文と比較構文についての意味論に関しての文献を収集、分析し、調べた言語の記述にどれだけ応用できるかどうかを調べた。

４．研究成果

言語調査の結果、明らかになったことは、以下の三つである。

(1) 世界の言語の多くは、中国語タイプでも英語タイプでもなく、（比較の対象を導入する前置詞句／節を除き）比較級を表す特別な形態素をもたない言語である。このタイプの言語も、比較の対象の導入の仕方によって、大きく分けて二つの分類ができる。
①比較の対象を前置詞で導入する。
②比較の対象を移動動詞で導入する。

(2) 英語タイプの形容詞システムを持つ言語は、相当数認められるが、さらにいくつかの下位分類ができる。
①形容詞の屈折で比較級を表すもの
②形容詞の重畳で比較級を表すもの

(3) 中国語タイプの形容詞システムを持つ言語は極めて限られており、中国語と、中国内の少数民族であった。

(4) 単独節では比較の意味を表せない言語がある。このような言語では、対極にある形容詞または形容詞肯定形と否定形でそれぞれ

構成される二つの節により比較級が表される。

以上の観察から、形容詞の類型論としては、次の四つが考えられる。括弧内に観察された言語名を示す。

(1)絶対級無標／比較級有標の形態を持つもの（English, Karo Batak, Madurese, Limos Kalinga, Sundanese, Semelai, Chamorro）

(2)絶対級有標／比較級無標の形態を持つもの（Chinese, Qiang, Baumaa Fijian）

(3)絶対級も比較級もともに無標だが、比較の対象を別に添加することで比較級を表すもの（Japanese, Worora, Muna, North-East Ambae, Mam, Wappo, Indonesian, Baumaa Fijian, Sundanese, Tinrin, Māori, Tetun, Abun, Tawala , Jabêm, Sye, Seediq）

(4)文の並列によって比較級を表すもの（Dom, Korowai, Sinaugoro, Nabak）

この分類は、意味論をそれぞれ構築するための作業仮説的なもので、まだ絶対的なものではない。一つのタイプに属していても、先に述べたように、下位分類がさらに必要と思われる場合はある。例えば、絶対級／比較級無標の言語では、比較の対象を文中に前置詞等で導入するか、移動動詞で導入するかにより、下位分類が可能であるが、両者とも統語的な手段により比較級を形成しており、のちに述べる比較級を形成する操作の作用する部門は統語構造であると思われる。従って、一つの分類にしているが、移動動詞が形容詞の接辞のようになれば、より絶対級無標のタイプ（英語タイプ）に近づく。さらに絶対級／比較級無標タイプの言語では、副詞が任意に比較級構文に現れることが多い。例えば、日本語では、「太郎は次郎より若い」に対し、「太郎は次郎よりもっと若い」ということができる。これらの言語における「もっと」のような比較級副詞は、純粋に比較級の形態素ではない。日本語でもそうだが、単純な比較とはまた違うニュアンス、意味を担っている。これらの副詞の位置づけについてもさらに意味論を考える必要がある。また、文の並列により比較を表す言語には、例えば、パプアニューギニアの言語がある。具体的には、「A は大きい、B は小さい」という形式で A が B より大きいことを表す。この構文が比較級構文であるかどうかの認定は難しいところであるが、比較の概念を表す方法にこの構文しかない以上、比較級構文として扱った。

最後に、この四つのタイプ分けを踏まえ、形容詞の意味論を構築した。まず、比較級構文を作る際には、少なくとも二つの操作が必要とされることに注目し、これが類型論的なパラメターではないかと予測した。その二つの比較級化操作とは、程度抽象化（Degree Abstraction）と最大化操作子（Maximality Operator）である。比較構文の解釈においては、まず、主語と比較の対象それぞれの表す個体について、それぞれを形容詞の表す属性スケールにおいてどの程度を持つのかということを計算する必要がある。これが程度抽象化の操作である。さらに、程度抽象化で得られた程度は集合であるので、二つの個体のもつ程度を比較するには、その集合中の最大値を取り出す、または最大の集合を特定する必要がある。この操作が最大化の操作である。上記の四つのタイプの言語は、この二つのパラメターで分類される。即ち、タイプ１は程度抽象化も最大化操作子も利用できる言語、タイプ２は程度抽象化が利用できず、最大化操作子のみが利用できる言語、タイプ３は両方とも利用できない言語、タイプ４は程度抽象化は利用できるが、最大化操作子は利用できない言語である。これまでにも、日本語について程度抽象化ができないという指摘はあったが、もう一つのパラメターを発見したことがこの研究の成果である。

具体的な研究発表としては、この四つの言語グループの分類とそれぞれの意味論について、二つの国際学会で発表した。21st Pacific Science Congress 及び The 22nd Pacific Asia Conference on Language, Information である。特に後者は、論文のフルテキストが Proceedings に掲載された。

論文「中国語の三つの比較級構文」では、以上の類型論的な立場と構築した意味論を使って、中国語の比較級構文について詳しく論じたものである。ここでは、形容詞の移動が絶対級化、比較級化に関わっていることを明らかにした。形容詞は、形容詞の位置にとどまっていると、名詞的な性質を持つ。それが程度句の主要部に移動すると、絶対級を表すようになり、さらに動詞句の主要部に移動すると、比較級を表すようになる。この分析は、研究の背景のところで述べたように、統語論的に [+N] と [+V]という素性で分けられる二種類の形容詞のタイプ分けとも符合する。中国語について得られたこの観察は、形容詞を分類する統語的観点と意味的観点の融合を体現しており、この観点からの類型論を確立する可能性を示唆している。

最後に、いくつかのさらなる分析と考察が必要な点を挙げる。一つは、4つのタイプ内での下位分類の可能性である。例えば、形容詞の後に移動を表す動詞（行く、去るなど）を用いて比較級を表すもの（例：Sye, Seediq

など）がみられるが、これは接辞のように考えられるときには、英語タイプに、前置詞のように考えられるときには日本語タイプに分類してきた。この境界例について、さらに検討する必要がある。

また、日本語タイプの言語の中で、比較級を修飾する副詞は特異な働きをしている。これらの副詞も、英語タイプと紛らわしく、注意深く意味を検証する必要と、これらの意味を記述した意味論を形式化する必要がある。今後さらに英語タイプに見られる強調の副詞や中国語タイプに見られる程度副詞との違いを明らかにする予定である。

なお、本研究では、当初、世界の言語のうち語族による偏りのないサンプルを収集する予定であったが、調査の日程が遅れたために、先に着手した中国、環太平洋圏の言語が多くをしめ、ヨーロッパ言語やアフリカの言語についてはサンプルがわずかしかないという結果になった。今後の展望としては、通言語的調査についてさらに拡充することを一つの目標にしたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
①伊藤さとみ　「中国語の三つの比較級構文」お茶の水女子大学中国文学会会報、査読有、第 28 号、2009 年、1-20。

〔学会発表〕（計 3 件）
①伊藤さとみ　「中国語の比較級構文」中国語学会 2008 年第３回関東支部例会、2008 年 12 月 13 日、お茶の水女子大学、東京。
②伊藤さとみ“Typology of Comparatives” The 22nd Pacific Asia Conference on Language, Information and Language 、November 22th 2008, De La Salle University, Cebu, Philippines.
③伊藤さとみ“Typology of Adjectives” 21st Pacific Science Congress、June 14th 2007、Okinawa Convention Center, Okinawa, Japan.

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤さとみ（ITO SATOMI）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：60347127

様式 C-19（記入例）

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　　年　　月　　日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2004～2007
課題番号：１６００００００
研究課題名（和文）　〇〇〇〇〇〇〇〇に関する研究

研究課題名（英文）　ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

研究代表者
学振　太郎（GAKUSHIN TARO）
〇〇大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

研究成果の概要：〇〇〇〇〇〇〇〇

３．研究の方法

(1) ○○○

(7)○○○

〔産業財産権〕
○出願状況（計□件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://○○○○○○○○○○○○○○○○

６．研究組織
(1)研究代表者
学振　太郎（GAKUSHIN　TARO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
(2)研究分担者
学振　花子（GAKUSHIN　HANAKO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
学振　次郎（GAKUSHIN　JIRO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
学振　三郎（GAKUSHIN　SABURO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

(3)連携研究者
学振　四郎（GAKUSHIN　SHIRO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：